話すこと[やり取り]

「やり取り」ができる主体的・協働的な学習者を育てる

今井 裕之
(関西大学)

*NEW CROWN*における「やり取り」の指導のアプローチ

新しい*NEW CROWN*では、即興的なやり取りの指導を、Small Talk → Small Talk Plus → Take Action! Talkの3セクションでの言語活動を通して行う。相手と互いの気持ちや意見を交わしながら、多様な目的・場面・状況での言語活動の課題を、協働して乗り切る体験を重ねて即興的に話す力を育成する。

Small Talkは、各レッスンのPart 1〜2の最初に配置され、小学校との接続を想定し、身近な話題について話すことから授業を始めることができる設計になっている。Small Talk Plusは、レッスン中間、Goal Activityの前に配置され、会話を継続するためのストラテジーやスキルを学ぶ。そしてTake Action! Talkは、やり取りの中でも高度な言語活動を系統的に指導するため、レッスンから独立して配置している。現行の*NEW CROWN*と比較して、「やり取り」の指導を、より頻繁かつ継続的に行う設計になっている点が特徴である。また、言語活動をくり返す途中に「中間指導」を行うポイントを明示しているところも特徴的だろう。活動をただくり返すのではなく、中間指導で「気づき」を促し、学びを深める「Do, Learn, and Do Again方式」を取り入れている。

Small Talk:「まずやってみる」ことに意義がある

レッスンの各Partは、Small Talkから始まる。各Partのテーマやトピックに関する身近で導入的な話題について、学習前の時点の自分の力で「まず、何がどこまでできるかやってみる」という現状把握を意図した活動である。

「習う前にできるはずがない」「間違った発話をさせるだけ」「生徒たちがやる気や自信をなくす」といった指導者心理が働くかもしれない。しかし、Small Talkでは、そのPartで学習する言語材料等を使う必要はなく、既習の語句や表現で「友だちに言いたいことがまだうまく言えない」ことを実感し、言語面、内容面で自分が知りたいこと、できるようになりたいこと（主体的な学習目標）を自覚させ、「できるようになりたい!」という実感を伴った目標を設定させることを意図している。また、「生徒たちが自信をなくす」という不安については、先生が“Don't be afraid. Mistakes are OK.”と励まして解決しようとするのではなく、パートナーとの「二人称的関係」で解消させたい。二人称的関係とは、聴衆の一人として発表者の話をただ聞く「三人称的関係」とは異なり、常に相手に反応する「応答責任」と、相手に負の感情を抱かないよう「感情調整する責任」を互いが果たす関係性である。生徒たちが相手との二人称的関係を大事にしようとする心理に任せてみることは、主体的な学びのスタート地点でもある。

ただ、すべてを生徒任せにするわけではない。各Partの終わり（ページ右下）に配置したThink about Yourselfは、Small Talkの話題に関連する内容についてやり取りを行い、各Partの学習を通して、できるようになったことを確認する。例えば2年Lesson 5 Part 1であれば、Small Talkでまず、「旅行に行ってみたい国について」ペアで話し、Part 1の終了時のThink about Yourselfでは、「海外から日本に来た旅行者に紹介したい場所」について相手に説明する（この話題は単元末のGoal Activityにもつながる）ことで、自分の表現力の変化を把握する。もちろんこの時点では劇的に成長してはいないが、Small Talkの時は気づかなかった課題に気づくことができれば、十分に目的は達成したといえる。この際、お互いのパフォーマンスにコメントし合うことが、自分の課題を発見することにつながるのも、「二人称的関係」での学習活動のメリットである。お互いが相手の学びや成長をサポートし合う関係性を築くことが「主体的に学習に取り組む態度」の指導につながる。自律する過程において、相互依存することの大切さを生徒たちが理解できれば、学習共同体としての教室の質が高まる。

2年 Lesson 5 Part 1

Small Talk Plus：会話を継続するためのストラテジーの指導

チャットやスモールトークを継続的に行っている指導者から、「言語材料は定着するのか」「どんな技能を指導しているのか全体像が見通しにくい」という声を聞くことがある。

Small Talk Plusは、レッスンの中間地点に配置されており、各レッスンのテーマや言語材料を踏まえて、「レッスン内の流れ（＝横のつながり）」をしっかりと確保しつつ、レッスンごとに、会話を継続させるためのストラテジーやスキルの学習に焦点を当て、「レッスン間の系統性（＝縦のつながり）」を持たせることで、会話を継続させるためのストラテジーやスキルを体系的に学ぶセクションである。ストラテジーやスキルの例として、「相手の発話に共感しながら応答する」「情報をつけ加えながら説明する」など、会話を継続するために、「聞き手」「話し手」それぞれの役割に合った工夫の仕方を学ぶ仕組みになっている。

Small Talk Plusでは、1時間の授業の中で、話す機会を3ラウンドに分けて設計している。Round 1では、トピックについて話しながら中間指導を入れて、Tips!（＝そのレッスンで学ぶストラテジーやスキル）を活動しながら確認する形で学ぶ。Round 2では、同じ話題について、ペアを変えてよりたくさんの人と話す。ペアが変わることで、自分の発言内容・表現や話の展開が変わり、ストラテジーやスキルを意識的に使おうとする。その際、指導者は中間指導の機会をとり、生徒たちに自分のパフォーマンスをモニターさせる。そうさせることが自己調整能力の育成につながる。Round 3では、話題を変える。話題を変えると言っても、全く新しい話題ではなく、すでに話したことがあるPart 1〜2のSmall Talkのテーマを用いることで、自信を持って話す活動に臨むことができるし、前の授業の時の自分のパフォーマンスと比較して、自分の成長を実感することもできる。このように、“Do, Learn, and Do Again”とスパイラルに取り組むことで、自分たちの経験の蓄積を学びや成長として実感しやすいように*NEW CROWN*は設計されている。第二言語習得にくり返しは不可欠だが、「何をくり返すのか」「どのようにくり返すのか」ということについて、私たち教師は、共通した認識を持つべきであろう。文法定着・語彙記憶のためのくり返しだけがくり返しではない。会話を継続するためのTips!を、相手や話題を変えながらくり返し活用することも、重要なくり返しである。

2年 Lesson 5 Small Talk Plus

Take Action! Talk：リアルな場面設定、高度な話題や課題

*NEW CROWN*では、これまで「やり取り」をCEFR等の考え方を取り入れて3つのカテゴリで捉えてきた。

①相手と気持ちなどを伝え合い、良好な関係づくりを目的とするChat
②買い物など明確な目的のために情報の交換を行うTransaction
③問題解決を図ることを共通目的とするDiscussion

新しい*NEW CROWN*もその枠組みに変更はない。Small TalkとSmall Talk Plusは、主にChatの習熟に焦点を当てているのに対し、Take Action! Talkは、共通のゴールが明確なTransactionタイプと、問題解決を図るDiscussionタイプのやり取りに焦点を当てている。

Transactionタイプのやり取りの特徴は、場面や状況が明確で具体的であり、目的達成には参加者の協力が必要で、各々が果たすべき役割が明確な点にある。例えば、右のTake Action! Talkのような「電車の乗り換え案内」の場合は特に、場面や状況の設定なしには成立しない。また、「目的地にたどり着く方法を尋ねる・教える」を達成するためには、双方が表裏の役割を演じ、果たすことが必要である。これらの必要条件を総合すると、Take Action! TalkのTransactionの指導には「ロールプレイ」が最適であり、目的達成のための役割を演じること（perform）こそが、Take Action! Talkの学び方のポイントである。

問題解決を目的とするDiscussionタイプの場合、問題解決による合意形成のために、参加者の協力が必要である点では、Transactionと似ている。また、このタイプでも、場面・状況にあたる、議論の前提条件等の設定が活動の成否を決めるため、ロールプレイを採用している。

Take Action! Talkは各学年に4回設定されている。年間指導計画が見通しにくいかもしれないが、Transactionタイプのやり取りが行われる特定の場面と、「言語の働き」を組み合わせ、3学年でバランスよく学習できるよう配置している。また、Discussionについては、より高度なやり取りの能力が必要であるため、主に2・3年の2年間を通して、徐々にDiscussionに必要な下位技能を積み上げられる配置にしている。

2年 Take Action! Talk 3

やり取りの指導は、小学校の学びが確実に生かせる領域である。*NEW CROWN*では、Small Talk, Small Talk Plus, Take Action! Talkで、やり取りの3つのカテゴリをまんべんなく体系的にカバーした。中間指導で生徒の自己調整力を伸ばしながら、「Do, Learn, and Do Again方式」の指導で、小中英語教育の連携がますます強まることを願う。